

機関番号：35413

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21730479

研究課題名（和文）

ソーシャルワーク教育におけるストレンクス - パワー変容過程の展開ツールの活用

研究課題名（英文）

Practical use of the tool for the approach of the changing process between strengths and power in social work education

研究代表者

山口 真里（広島国際大学・医療福祉学部・講師）

研究者番号：70444566

研究成果の概要（和文）：

本研究では、教育でのストレンクス - パワー変容過程版エコスキャナー活用の可能性を模索し、(1)ストレンクス - パワー変容過程版エコスキャナーを用いた演習のレポートの整理・分析、(2)ストレンクス教育の先行研究の整理、(3)「相談援助」系科目担当教員へのヒアリング調査、(4)調査結果の分析によるストレンクス教育の現状の把握、(5)国内外の関連学会や研究会への参加による本研究の意義の確認と研究経過の報告、(6)ストレンクス演習プログラムの作成と演習による教育効果の検証、の6点の研究課題に取り組んだ。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to explore the ability of the tool for the approach of the changing process between strengths and power in social work education. Therefore, the contents of the following: 1.Analyzing the reports of the university students who were lectured practical social work education by use of the tool for the approach of the changing process between strengths and power, 2.Review of the research related to the strengths education in social work, 3.Interview to the 3 teachers in charge of subjects of social work in each university, 4.Grasping at the present situation of the strengths education in university, 5.Participation to the conferences (domestic and abroad) about social work research, and publishing the process of this research at them, 6.Programming and lecturing the practical social work education focused on strengths and verification of the effect for students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：

キーワード：ソーシャルワーク教育、ストレンクス - パワー変容過程、ストレンクス教育

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの研究経緯

近年、ソーシャルワークでは、ストレングスがソーシャルワーカーと利用者との対等な関係を構築し、真に利用者の望む生活を実現する支援展開の鍵概念として注目されている。一般にストレングスとは、利用者が日常生活のなかで培ってきた身体的・精神的・社会的能力や強さ、豊かさなどを示し、利用者の生活世界を重視する概念である。

ストレングスに焦点化した先行研究は、主にエンパワメントや社会構成主義を援用した研究のなかで行われてきた。例えばエンパワメント研究でストレングスは、カウガーら (Cowger, C. D. & Snively, C. A.) から「エンパワメントのための燃料やエネルギー」¹⁾として重視され、エンパワメントの基盤となる重要な概念と位置づけられている。一方でストレングス視点には、ソーシャルワーカーが利用者の主観的な生活世界を理解することで、利用者中心の支援を展開しようとするところに特徴がある。こうしたストレングス視点の考え方には、社会構成主義の「私たちが世界をありのままに把握するのではなく、自分自身の知識に基づいた枠組みによって把握している」²⁾という考え方も包含されている。すなわち社会構成主義の研究においても、利用者が自らの世界を意味づける基盤としてストレングスを位置づけている。

このように先行研究では、ストレングスへの着目の必要性が強調されているが、具体的な支援過程や展開方法については、十分明示していない現状がある。しかしストレングスに着目したソーシャルワーク実践の方法を確立するには、支援過程局面での具体的な実践手続きとその展開方法を考察する過程研究が必要不可欠である。そこで京都府立大学大学院博士論文研究「ソーシャルワーク実践におけるストレングス - パワー変容過程の構築」では、ストレングスに着目した支援過程展開として、利用者が培ってきたストレングスを利用者自身が他者や周りに影響を与え、行動を起こしていくパワーに変容させるストレングス - パワー変容過程を提示した。また博士論文研究のなかでは、利用者のストレングス状況とその変容を捉えるツールとしてストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーを試作した。しかしツール検証をつうじたその効果と活用方法の可能性の模索は、研究課題として残された。

(2) 本研究の動機

一方で、これまで広島国際大学の社会福祉援助技術論や社会福祉援助技術演習のなかで、ストレングスに着目して支援を行う重要性について講義を行う機会があった。そこで、事例を用いて学生にストレングスへの着

目を促す演習を行ったが、具体的なストレングスが何なのかを把握することに苦戦している様子がみられた。そこで次に、ストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーを用いて、事例の利用者のストレングスに着目する演習を行ったところ、学生からは「ストレングス視点とは、どこに着目するのかがわかった」「利用者の生活への見方が変わった」との感想が得られた。このような体験をつうじて、ストレングスに着目する教育方法としてストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーを活用し、その教育効果を確認してみたいと考えるようになったのである。

1) Saleebey, D. ed., The Strengths

Perspective in Social Work Practice the 3rd edition, Allyn and Bacon, 2002, p.108

2) 狭間香代子『社会福祉の援助観 ストレングス視点/社会構成主義/エンパワメント』筒井書房、2001年、p.98

2. 研究の目的

本研究は、博士論文研究「ソーシャルワーク実践におけるストレングス - パワー変容過程の構築」で試作したストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーの活用からその教育効果を確認するものである。そしてストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーの教育での活用方法を模索することが目的である。

エコスキャナーとは、利用者の生活状況とその変容を捉えるアセスメント・ツールである。そしてストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーとは、ソーシャルワーカーが利用者のストレングスに着目し、その変容状況を把握できるように従来のエコスキャナーを改良したツールである。具体的な使用手順は、まずストレングス - パワー変容過程エコスキャナーに設定されたストレングスにかかわる128の質問項目(32領域×4つの質問項目)に回答し、利用者のストレングス状況をアセスメントしていく。その結果は、グラフという結果で提示され、ひと目で利用者のストレングス状況が把握できる。さらに時間的経過に沿ってグラフを重ねていくことで、ストレングスの変容状況の把握も可能となるのである。このようにストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーは、これまで具体化されてこなかったストレングスに着目した支援方法を確立する手段となる。さらにソーシャルワーカー養成のなかで、ストレングス視点を具体的に教える方法について言及した先行研究はまだ見当たらない。そのため本研究では、ストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーをソーシャルワーク教育に導入することで、ストレングスに着目

した支援方法を実践できる人材養成を行っていく手がかりをつかみたいと考えた。

3. 研究の方法

本研究は、ソーシャルワーク教育におけるストレングス教育の現状の把握とストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーの活用による教育効果の検証を行うため、以下の6点を研究課題とした。

- (1) ストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーを用いた社会福祉援助技術演習のレポートの整理・分析
- (2) ストレングス教育の先行研究の整理
- (3) 「相談援助」系科目担当教員へのヒアリング調査
- (4) ヒアリング調査結果の整理・分析によるストレングス教育の現状の把握
- (5) エコシステム研究会や国内外の関連学会への参加による本研究の意義の確認と研究経過の報告
- (6) ストレングス演習プログラムの作成と演習による教育効果の検証

4. 研究成果

上記の6点の研究課題に取り組んだ結果、以下のような成果を得ることができた。

- (1) ストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーを用いた社会福祉援助技術演習のレポートの整理・分析

ソーシャルワーク教育において社会福祉援助技術演習(相談援助演習)は、理論と実践をつなぐ講義として重視されてきた。これはストレングス教育においても同様であると考え、2007~2009年度に担当した社会福祉援助技術演習のなかで、ストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーを用いた演習を継続して行ってきた。その結果、学生52名から感想などを記したレポートを得ることができた。そこで今年度は、学生の承諾を得たうえで、これまでのストレングス演習のレポートの整理・分析を行い、演習の課題を明らかにした。

その結果、学生52名中45名(約86.5%)が演習をつうじて事例の利用者のストレングスを「発見できた」「ある程度発見できた」「少し発見できた」とレポートに記載していた。また2009年度のレポート課題にストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーを使用したことで視点や考え方に変化がみられたか、あればその変化の内容を書くよう指示したところ、15名中11名の学生が「視点や考え方に変化があった」と回答し、利用者のストレングスに着目する視点の獲得を実感できたことがわかった。具体的には、「利用者の立場に立って考えられるようになった」「どんな利

用者でもストレングスを持っているということが理解できた。勝手にその人のことを決めつけてはいけないとわかっていても、実際は結構決めつけてしまっていることがわかった」「利用者のもつ資源や能力などに気づくことができただけでなく、それを使ってどんなことができるかを考えられるようになった」などの回答が得られた。

このように、ストレングス-パワー変容過程版エコスキャナーを用いた演習を行うことで、学生たちがストレングス視点を持つことができたり、その視点から支援をすることの重要性を理解できたりするという教育効果への示唆が得られた。

- (2) ストレングス教育の先行研究の整理

わが国では、社会福祉士法及び介護福祉士法の改正に伴い、2009年度から社会福祉士養成課程で新カリキュラムに基づく教育が始まった。科目名の変更や時間数の増加、教育内容の見直しが行われた新カリキュラムでは、従来の社会福祉援助技術関連科目の充実が図られている。その結果、「相談援助の基盤と専門職」、「相談援助の理論と方法」、「相談援助演習」、「相談援助実習指導」、「相談援助実習」の5科目(以下、総称して「相談援助」系科目とよぶ)が社会福祉士養成課程の科目として登場することとなった。なかでもシラバスからは「相談援助の基盤と専門職」、「相談援助の理論と方法」の科目では、従来のカリキュラムと比較してストレングスモデルやストレングス視点などストレングスにかかわる教育内容が強調されていることがわかった。

このような流れからみても、わが国でストレングスに着目できるソーシャルワーカーの養成が期待されていることがうかがえ、ストレングス教育が重視されていることが理解できた。特に「相談援助」系科目内容には、学生がソーシャルワーカーとしてその理論を実践へと具体化していくプロセスが内包されている。同様にストレングスに着目した支援についても、ストレングスにかかわる理論を学んだうえで実践に具体化できる教育方法が必要とされていると考えられる。

しかしソーシャルワーク教育研究では、ストレングス教育について言及した先行研究はほとんどない。すなわち「相談援助」系科目のストレングス教育の内容や方法、「相談援助」系科目間の連動性、教育効果の検討の現状については把握できていないことが明らかとなった。

一方で、ストレングスと関わりの深い概念であるエンパワメント研究においては、その教育方法について言及している先行研究を見つけることができた。例えば保正友子は、「ソーシャルワーカー自身がエンパワーメ

ントとはどのようなことなのかを、自らの体験として実感すること³⁾が重要であると捉え、エンパワメント志向の演習の実践を提唱し、当事者のエンパワメントにつながる学生自身のエンパワメントを図ることを強調している。

3) 保正友子 (2002) 「学生のエンパワーメントを促す社会福祉援助技術演習の検討」『ソーシャルワーク研究』Vol. 28 No. 3 相川書房、p. 50

(3) 「相談援助」系科目担当教員へのヒアリング調査

先行研究をふまえわが国のストレングス教育の現状と課題を明らかにするため、相談援助系科目(「相談援助の基盤と専門職」「相談援助の理論と方法」「相談援助演習」「相談援助実習指導」「相談援助実習」)の担当教員にヒアリング調査を実施することとした。ヒアリング調査項目については、教育背景も明らかにするため、担当教員の所属学科の概要(定員や各学年の人数、入試制度、カリキュラム、教員体制)と「相談援助」系科目の体制、も聞き取れるよう工夫した。それをふまえたうえで、①「相談援助」系科目におけるストレングス教育内容や方法、②「相談援助」系科目間の連動性、③学生の反応や効果、④「相談援助」系科目以外での講義・演習等での取り組み、⑤ストレングス教育の意味、⑥ストレングス教育の課題、の6点に焦点を当ててヒアリング調査項目を作成した。

そして「相談援助」系科目を全て担当している社会福祉士養成校の4年制大学教員3名へのヒアリング調査を実施した。

(4) ヒアリング調査結果の整理・分析によるストレングス教育の現状の把握

ストレングス教育にかかわるヒアリング調査の結果、以下のような現状が明らかになった。

① 「相談援助」系科目におけるストレングス教育内容や方法

まず「相談援助の基盤と専門職」「相談援助の理論と方法」の2科目においては、1) ソーシャルワークの歴史、2) モデルやアプローチ、3) 支援過程、の3つの内容でストレングス教育が行われていた。まず1) ソーシャルワークの歴史については、医学モデルから生活モデルへのパラダイムが転換した流れの一部としてストレングスモデルの登場が位置付けられ教えられている。また2) モデルやアプローチ教育では、ストレングスモデルやケアマネジメント、エンパワメント・アプローチに関連した内容で教えられていた。そして3) 支援過程では、ストレングス視点をもって過程展開していくことが強調されていた。例

を挙げると、ストレングスに着目してアセスメントすることで、短所を長所に転換させるなど、状況を多面的に捉えて問題解決の糸口をつかんでいく重要性が教えられていた。

また「相談援助演習」では、事例検討などでストレングス視点を活用したり、学生たちに各自のストレングスを見出し、自身をプラスの視点でみることの大切さを実感してもらったりするという取り組みが行われていた。

そして「相談援助実習指導」「相談援助実習」では、学生がストレングスモデルなどに関心を持っている場合には実習計画に反映させるような指導を行っていたり、実習巡回時に利用者や施設の状況などをストレングス視点で捉えるような指導を行ったりしていることがわかった。また実習後の指導で、学生自身にストレングス視点を向けさせ、自分たちが実習で獲得できたことを整理し、支援者としての自信と今後の課題を認識してもらうという取り組みも行われていることがわかった。

② 「相談援助」系科目間の連動性

教員の所属学科の科目担当体制などにもよるが、同一教員が「相談援助の基盤と専門職」「相談援助の理論と方法」「相談援助演習」を担当している場合は、ストレングス教育も理論と事例検討などの内容を連動させて学生にイメージさせやすい講義を行うことができるという回答を得られた。また教員自身がストレングスに研究関心がある場合は意識的に取り入れるようにしている場合もあった。

ただし「相談援助演習」「相談援助実習」「相談援助実習指導」では、複数の教員が担当することが多く、担当教員間の共通認識がまだ十分にできていない場合もある。その際には、科目間の連動をさせることが難しくなるという現状も理解できた。特に「相談援助実習指導」「相談援助実習」では、実習先や学生の関心によって担当教員や巡回教員も異なるため、他科目との連動が困難になることがわかった。

③ 学生の反応や効果

「相談援助」系科目で学生自身がストレングス視点を自分に向けてみるという体験をした学生は、自信を獲得することでストレングス視点を利用者に向けた意義を体感することができていた。またこの体験により、支援者自身が多面的な利用者理解をすることやポジティブ思考になる重要性を理解することがわかった。またストレングス教育を行っただけで事例検討を行うと、支援計画を考察する際に、学生の考える支援の選択肢が増加するという回答も得られた。

④ 「相談援助」系科目以外での講義・演習等での取り組み

「相談援助」系科目以外では、ゼミ単位でストレンクス教育を意識した取り組みが行われていた。例えば、ゼミで学生が関心を持ったストレンクスに関わる文献を読んで発表を行うことが挙げられる。またゼミで学生が各自の実習体験を振り返って自分たちができたことを取り上げ、それがなぜできたのかを分析して自己評価を高めていけるよう取り組んでいるという回答も得られた。「相談援助」系科目よりも少人数で行うゼミでは、学生に対してストレンクス教育を意識しながら細やかな教育指導を行っていることがわかった。またストレンクスにかかわらずソーシャルワークの理解を浸透させていくためには、講義・演習・実習・ゼミ・卒業研究をつうじて一貫して教育することが重要であるという回答もあった。

⑤ストレンクス教育の意味

ストレンクス教育を行うことで、学生が多角的に状況を捉え、利用者の立場に立って考えることができるという回答は3人の教員に共通していた。ソーシャルワークの対象となる利用者は、深刻な状況を生き抜いてきた人が多い。そうした人々に肯定的な言葉かけをいかにできるか、また彼らの自己否定を軽減する作業を共にできる人材の養成は重要であるという回答も得られた。そのためには、学生自身が成功体験をし、プラス思考で支援ができることが必要であるという意見もあった。これはエンパワメント教育の先行研究からも裏付けることができる回答であった。

一方で、ストレンクス視点をもつことは、支援の選択肢を増やすなど実践に効果を挙げることができ、それがソーシャルワーカーとなった際の自信や仕事への意欲、社会的評価につながるという回答も得られた。

⑥ストレンクス教育の課題

ストレンクス自体は発想だけが強調されることが多く、その具体的な支援方法が研究課題として十分に整理されていないため、教育内容や方法に課題が多く残されているという回答が得られた。また学生自身にストレンクス視点を向けてもらう必要性を痛感しており、教員がいかに学生のストレンクスに着目しそれを引き出していけるかということに日々課題を感じているという回答もあった。

このように3名の大学教員へのヒアリング調査からは、ストレンクス教育の現状を聞くことができた。今回のヒアリング調査は、3名のみの実施となったが、今後も継続した調査を続け、わが国でのストレンクス教育の現状と課題を明らかにしていきたい。

(5)エコシステム研究会や国内外の関連学会への参加による本研究の意義の確認と研究経過の報告

まず継続したエコシステム研究会への参加からは、ソーシャルワーク教育におけるストレンクス-パワー変容過程版エコスキナーの活用の報告へのアドバイスを得ることができた。さらに、他バージョンのエコスキナー活用の報告を聞くことでエコスキナー活用の様々な可能性について理解を深めることができた。

またソーシャルワークにかかわる国内学会や国際会議への参加をつうじて、エコスキナーの精緻化への示唆を得たり、ソーシャルワークにおける本研究の位置づけを確認したりすることができた。

そしてこれまでの研究の経緯とストレンクス教育による発想の転換の重要性については日本社会福祉学会第57回全国大会で研究報告を行った。またヒアリング調査結果の分析によるストレンクス教育の現状と課題については、日本社会福祉学会第58回全国大会で報告を行った。報告会場にいた社会福祉士養成校教員からは、質疑応答などをつうじて本研究の意義への賛同を得ることができた。具体的には、学生が自分自身にストレンクス視点を向けることで自信を持つ方法や、そのことが実際の支援に有意義となることへの関心が強いことがうかがえた。

(6)ストレンクス演習プログラムの作成と演習による教育効果の検証

当初は、ストレンクス-パワー変容過程版エコスキナーを活用したストレンクス演習のプログラムを作成し、演習を実施する予定であった。そして①ストレンクスについて理解できたか、②ストレンクスに着目できたか、③その変容状況を理解できたか、④ストレンクスに着目する視点を今後活かしていけるか、などのアンケート調査を行い、ストレンクス-パワー変容過程版エコスキナーの活用効果を検証していきたいと考えていた。

しかし本研究では、ストレンクス教育の現状把握の先行研究や調査実施などに時間を要し、ストレンクス演習の枠組みの提示と教育効果の検証は今後の課題として残された。これについては、本研究の継続課題としていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

①山口真里「ソーシャルワークにおけるストレンクス教育の現状と課題—『相談援助』

系科目担当教員へのヒアリング調査をつうじて一」日本社会福祉学会第 58 回秋季大会、2010 年 10 月 10 日、日本福祉大学(愛知県)

- ②山口真里「ストレングス - パワー変容過程における局面展開(2)ーストレングス - パワー変容過程版エコスキャナーの活用について一」日本社会福祉学会第 57 回秋季大会、2009 年 10 月 10 日、法政大学(東京都)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 真里 (YAMAGUCHI MARI)
広島国際大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：70444566

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：